

第1分科会【探究】

高大接続に向けた新しいチーム探究活動は、
どのように開発・実践されたのか？

〔報告者〕 齊藤 和彦（京都府立医科大学 教育センター入試室 特任教授）

〔報告者〕 伊藤 恵哉（京都府教育委員会 指導部 高校教育課 指導主事）

〔報告者／コーディネーター〕 乾 明紀（京都橘大学 経済学部 教授）

〔コーディネーター〕 井上 実（京都府教育委員会 指導部 高校教育課 指導主事）

様々な探究活動の広がりの中で、京都府教育委員会では、学校の枠を超えてチームで探究活動に取り組む「府立高校共通履修科目（スマートAP）」を開発・実施している。この科目が、どのように高大の連携において開発され、どのように生徒の問いを引き出しながら実践され、どのような効果を得ているのかを、開発・実践に関わった高大双方の教員が紹介する。また、よりよい探究活動のあり方について参加者と一緒に考える。

概 略

本分科会では、京都府教育委員会が実施している府立高校共通履修科目「スマートAP」の取組について、開発の経緯と実施内容及び成果を紹介した。取組の内容から「よりよい探究活動のあり方」について参加者によるグループディスカッションを行い、出された意見を全体で共有した。

<内容>

1 報告者紹介

2 報告（70分）

報告①スマートAPの概要の説明（伊藤氏）

- ・開発の背景（先取り学習の意義）
- ・府立鳥羽高等学校のSGH事業の成果
- ・新しいチーム探究活動の開発
- ・「スマートAP」のシラバス

報告②「スマートAP」の開発に関わる詳細報告（齊藤氏）

- ・開発に関わって工夫したこと
- ・初年度の成果を受けて、2年目に向けて改善したこと

報告③実施内容の報告（乾氏）

- ・どのようにして問いを引き出してきたか
（個人で問いを引き出し深める工夫、チームで問いを引き出し深める工夫）
- ・工夫の効果（生徒の変容、インタビュー内容から）

伊藤氏と乾氏により、取組の振り返りとまとめ

3 休憩（10分）

4 グループディスカッション (25 分)

6 人ずつの班に分かれてグループディスカッション

5 意見の全体共有 (15 分)

各班で出された特徴的な意見を発表し、全体で共有した。

全体討論の内容

短時間の質疑応答の後、グループディスカッションでの意見交換を実施した。各班での議論が深まるにつれて、本フォーラムのテーマである「探究」と「問い」についての参加者の思考が深まっているように感じられた。

<グループディスカッション>

テーマ例

「個人およびチームで問いを深めるにはどうしたらよいか」

「個人の力を最大限に活かしながら、チームによる探究の質を高めるにはどうしたらよいか」

「立てた問いに対して、どのように探究を進めるべきか」

出された意見の全体共有

- ・「スマートAP」の成果を、探究に興味を持たない生徒にどう広めていくかが課題である。
- ・探究をしたいと思うための工夫（感情が動く仕掛け）が大切である。
- ・問いづくりのトレーニングを行うことで探究の質が向上していくのではないかな。
- ・チーム探究活動においては、「チームでの振り返り」と「個人での振り返り」のサイクルを回すこと（「個」と「グループ」の往還）で、探究活動がより深まっていくように思う。
- ・チーム探究活動において、個人での成果のまとめも必要である。

到達点と今後の課題

本分科会で報告した「スマートAP」におけるチーム探究活動の柱となるのは、探究の流れをいくつかのステップ（7回の講義）に分けて、体系的に探究に係る学びを進めていくところである。しかし、単にステップを作れば学びが深まるものではない。各ステップに様々な仕掛けを組み込むことで、生徒の探究心をくすぐり、より高度な学びへ誘導する設計となっている点がポイントである。例えば、チームの中で個人を高める工夫や問いを深める工夫を取り入れてみたり、「！」や「？」などの心が動く仕掛けを入れてみたり、オンラインでの交流を散りばめたりすることで、生徒自身が主体的にリサーチクエスチョンを立案できるような設計としている。そういった点から、本事例は、探究活動を進めようとしている全国の高校にとって、大変参考になるものではないか。問いを深める工夫等の報告も全国の高校にとって探究活動を実施する上でのヒントとなったのではないかな。異なる在籍校の生徒が集まり、チームとなって探究を進める本事例のような取組が、多くの学校で実施されることになればと思う。

「スマートAP」受講生のインタビュー調査からは、本分科会で報告したプログラムや工夫が、

義務的で暗記再生重視の「浅い学習観」から、主体的かつ対話的で知識の関連付けを伴う探究的な「深い学習観」への転換を促していることがわかった。このような価値ある取組を、さらに広げていくための方策が今後の課題と考えている。



スライド1

第21回高大連携教育フォーラム 第2部第1分科会

**高大接続に向けた新しいチーム探究活動
は、どのように開発・実践されたのか？**

京都府立医科大学 教育センター入試室 特任教授 齊藤 和彦
京都府教育委員会 指導部 高校教育課 指導主事 伊藤 恵哉
京都橘大学 経済学部 教授 乾 明紀
京都府教育委員会 指導部 高校教育課 指導主事 井上 実

スライド2

目次

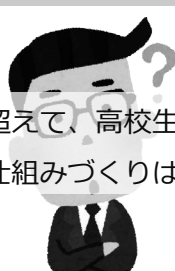
- 1 開発の経緯
 - ①開発の背景
 - ②府立鳥羽高校のSGH事業の主な成果
 - ③新しいチーム探究活動の開発
 - ④「スマートA P」の誕生
 - ⑤課題
- 2 どのようにして問いを引き出してきたか？
 - ①個人で問いを引き出し、深める工夫
 - ②チームで問いを生成し、深める工夫
 - ③工夫の効果
- 3 どのような効果を得ているのか

-問い・高校生活・キャリア開発に関する変化等-
- 4 最後に

スライド3

1 開発の経緯

「学校の枠を超えて、高校生が大学レベルの
学びに触れる仕組みづくりは実現可能か？」



スライド4

1 開発の経緯

「学校の枠を超えて、高校生が大学レベルの
学びに触れる仕組みづくりは実現可能か？」

一つの高校が複数の高校を繋ぐことはできるの？

単発の講演や研修なら実現可能か？

遠隔地の高校生が参加可能な仕組みとは？

これからの高校生に求められる資質・能力を育成するために必要な学びとは？

スライド5

1-① 開発の背景

WWLコンソーシアム構築支援事業（R2～4年度）

イノベティブなグローバル人材育成のため、SGH事業の取組の実績等、グローバル人材育成に向けた教育資源を活用し、高等学校等の先進的なカリキュラムの研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備をしながら、高校と大学、企業等が協働し、高校生へ高度な学びを提供する仕組みの形成を目指す。

スライド6

1-① 開発の背景

ALネットワーク京都の形成

時間的・地理的制約を超えた学びのネットワーク

管理機関：京都府教育委員会
ALネットワーク京都運営委員会

運営指導委員会

検証組織

カリキュラム・アドバイザー
海外交流官（バリエーション）

拠点校：京都府立鳥羽高等学校
SGH指定校（2015-19年度）

共同実施校：京都府立福知山高等学校

事業協働機関：国内外の大学・学術・国際機関・グローバル企業・伝説・文化団体

事業連携校（京都府立）

事業連携校（京都府外）

事業連携校（海外）

京都府WWL高校生サミット（R2から開催）

研究成果の普及
・フォーラム開催
・教員研修実施

ALネットワーク = Advanced Learning Network

ど真ん中に委員会、役割は高・大・社の繋ぎ手

SGH事業で蓄えた成果を普及

スライド7

1-② 府立鳥羽高校のSGH事業の主な成果
①グローバル・リーダー育成に資する教育課程等の研究開発 例 学校設定科目「ソーシャル・インテリジェンス」
②企業連携の推進 例 株式会社片岡製作所と連携した「海外インターンシップ」
③ICTを活用した遠隔教育 例 豪州・クイーンズランド工科大学による特別講義
④総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」 高大社連携を年間をとおして体系的に位置付けた探究活動 ・大学教員によるワークショップ ・大学教員による成果報告会等における指導、助言

スライド8

1-② 府立鳥羽高校のSGH事業の主な成果
「イノベーション探究Ⅰ」における高大連携（R元年度実績）
□京都大学大学院 神吉紀世子 教授 「『課題研究』と『まちづくり』の間を考える」
□福知山公立大学 杉岡秀紀 准教授 「フィールドワーク&ワークショップ入門」 「聞き手の心に火を付ける！プレゼンテーション術」
□京都橘大学 乾明紀 教授 「チームで課題探究をする前に—Team Building—」

スライド9

1-② 府立鳥羽高校のSGH事業の主な成果
「イノベーション探究Ⅱ」における高大連携（R元年度実績）
□京都橘大学 乾明紀 教授 「鳥羽高校の探究活動（課題研究）について」
□大阪大学講義及びワークショップ 「よい研究発表とはどのようなものか？」
□大阪大学アカデミック・ライティング講座

スライド10

1-③ 新しいチーム探究活動の開発
趣旨は？ 「Society 5.0に向けたリーディング・プロジェクト」*を踏まえ、生徒個人の興味・関心・特性に応じて、高度で多様な科目内容を大学と協働して開発し、かつ大学教育との効果的な接続に資するプログラムを提供する。
イノベーション探究の成果をベースとして
*「Society 5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」 Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会（平成30年6月5日）

スライド11

1-③ 新しいチーム探究活動の開発
目的は？ 「グローバルな社会課題の解決に必要なリサーチスキルを習得させ、イノベティブなグローバル人材の基盤となる論理的・批判的思考力と多文化協働力を育む。」
育成する資質・能力は？ ①多様な文化的背景を持つ人々と協働する力 ②科学的に思考・分析する力 ③課題解決の枠組みをデザインする力 ※WWL事業で育成を目指した6つの力の内の3つ

スライド12

1-④ 「スマートAP」の誕生		
日程	テーマ・内容	講師
4月	導入・リサーチスキル① 「探究の意義と問いの立て方」 「問を立てる—情報収集の仕方—」	福知山公立大学 杉岡准教授 大阪大谷大学 江上講師
5月	リサーチスキル② 「研究テーマの決定—RQの設定と仮説の構築—」	京都橘大学 乾教授
6月	リサーチスキル③ 「研究方法について—量的研究と質的研究—」	京都大学大学院 神吉教授
7月	多文化協働の手法 “Team Work and Collaboration”	クイーンズランド工科大学 講師
7月	「論理的・批判的に考える」	立命館大学 柿澤准教授
8月	リサーチスキル④ 「チームでフチ課題研究！—研究計画書を作ろう—」	京都橘大学 乾教授
9月	リサーチスキル⑤ 「プレゼンテーションの技法」・まとめ	福知山公立大学 杉岡准教授
10月	京都府WWL高校生サミット（高校生国際会議）	
※講師の所属等については、令和5年度時点		

スライド 13

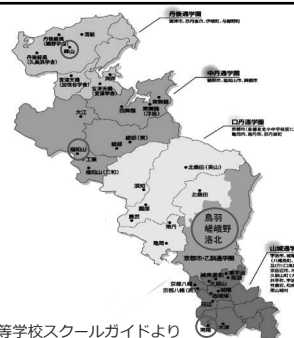
1-⑤ 課題

「どのように地理的制約を超えるのか？」



スライド 14

参加校 6 校



2022 京都府立高等学校スクールガイドより

スライド 15

1-⑤ 課題

「どのように地理的制約を超えるのか？」

- 新型コロナウイルス感染症拡大による教育活動の制限
- Web会議システムの急速な普及
- 「ピンチをチャンスに変える」
杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学・本府WWL事業運営委員）

オンライン実施

スライド 16

2 どのようにして問いを引き出してきたか？

「どうすれば受講者が実践的・体験的に学べるのか？」

オンラインでも



スライド 17

2 どのようにして問いを引き出してきたか？

「どうすれば受講者が実践的・体験的に学べるのか？」

- 時間的制約（年間 7 回の講義 + サミット）
- オンライン実施での協働学習
- 在籍校で異なる探究活動のスタイル
- 仮説検証型を学ばせたい

課題

スライド 18

2-① 個人で問いを引き出し、深める工夫

担当講師（乾教授）からの提案

第 2 回

- ・ドキュメンタリー映画を視聴
- ・心に抱いた「？」や「！」を言語化
- ・「？」や「！」から RQ を設定
- ・アブダクションによる仮説構築に挑戦

繋がり（ストーリー）を持たせる

第 6 回

- ・第 2 回の気づきから考えた RQ を持ち寄る。
- ・各自の RQ をもとにチーム RQ を検討
- ・チーム RQ を決めて研究計画書を作成



スライド 25

2-② 個人で問いを引き出し、深める工夫

【共通の工夫】教員からのフィードバック (FB)

第2講で「!」や「?」から個人のRQを生成する際のFB

Aさん:「消費者側の感覚と、インドやバングラディッシュの生産者の感覚が、服や賃金について、どのくらい違うのか。見方や感覚がどのくらい違うのか疑問として出てきた。」

講師:「何に感覚を合わせるのか。デザイン、賃金、労働環境や生活環境など、様々な視点がある。どこにフォーカスするかで、いろいろと絞れてくるのではないか。」

スライド 26

2-① 個人で問いを引き出し、深める工夫

ここまで紹介した工夫

- ① ドキュメンタリー映画を視聴
- ② ?や!をリサーチクエストに育てる
- ③ 仮説はアブダクションにて構築することを解説
- ④ RQに対する仮説をレポート課題に
- ⑤ 教員からのフィードバック

スライド 27

2-② チームで問いを生成し、深める工夫

「どうすればチームになり、議論の質が高まるのか?」

日常生活で話すことのない、在籍校の違う生徒たちが

オンライン上で



スライド 28

2-② チームで問いを生成し、深める工夫

【共通の工夫】チーム内の人間関係の構築 -アイスブレイク-

【第2講での工夫】キャラっこゲーム

キャラっこゲーム (キャラクターあてっこゲーム)

キャラ例 (これ以外もOK!)

△人兄弟の△人目	出身は△▽県	△▽が好きな△▽	5教科では△▽が得意
高校の部活は△▽	大学のサークルは△▽	アルバイトは△▽	1000万円あったら△▽しよう
△▽に見える△▽	血液型は△▽型	休日は△▽している	音楽は△▽を聴く
△▽にこだわりがある	人付き合いは△▽	△▽している時△▽	将来の夢は△▽

スライド 29

2-② チームで問いを生成し、深める工夫

【第6講での工夫①】個人レポートを共有する

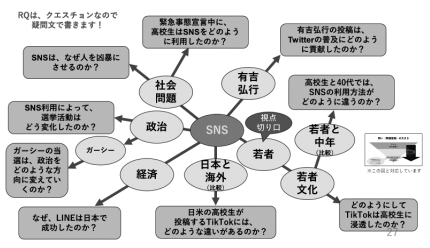
レポート共有 (個人ワーク)

- ・チームメンバーが作成したレポートを読み、各自の問題意識を共有します。
- ・提出されたレポート <https://drive.google.com/drive/folders/1Q0RvWteK>
- ・他者レポートを3本以上読んでください。チームのフォルダに3本以上のレポートがない場合は、他チームのレポートを自由に選んで読んでください。
- ・今から10分間をその時間とします。

スライド 30

2-② チームで問いを生成し、深める工夫

【第6講での工夫②】チームで切り口を考えてからチームRQを検討



参考文献: 宅間雄一 (2008) 『三訂版 はじめての論文作成術』日中出版

スライド 31

2-② チームで問いを生成し、深める工夫

【第6講での工夫③】 よいチームRQづくりための3つのステップと3つのポイントを提示

以下のアドバイスと
各自の発表やレポートを参考にしながら、
チームでRQを立ててください

3ステップ

1. 抽象的でよいので研究テーマを決める
2. 抽象的な研究テーマに対して、何のために研究（社会的動機）するかを意識しながら「切り口」を考える
3. 研究テーマと切り口からリサーチエスチョンを考える

3つのポイント

1. 自分たちが取り組みたいこと
2. 社会の役にたつこと
3. 自分たち（高校生）が期限内にできること（今回は、活動期間約1年間＋適切な支援が受けられるということを想定してください）

スライド 32

2-② チームで問いを生成し、深める工夫

【第6講での工夫④】 最終成果物のイメージを共有

リモートのため以下に変更します
これが本日の最終成果物（ゴール）です！

研究計画書

①リサーチエスチョン	②自分たちが取り組みたい動機・理由
チーム名 全員の名前	
③このRQを探究する社会的意義 (社会的背景、社会的な動機・目的など)	④仮説構築のための方法

スライド 33

2-② チームで問いを生成し、深める工夫

第2回のポイント

- ① チーム内の人間関係の構築 -アイスブレイク-
- ② 個人レポートを共有
- ③ チームで切り口を考えてからチームRQを検討
- ④ よいチームRQづくりための3つのステップと3つのポイントを提示
- ⑤ 最終成果物のイメージを共有

スライド 34

2-③ 工夫の効果 【6班の事例】			
	第2回のRQ	レポートのタイトル	チームのRQ
A	ファストファッションは何から始まったのか。	「ブランド品は、なぜ高いのかーシャネルからアパレルファッションを考えるー」	リサイクル率と社会的背景にはどのような関係があるのか？ in京都
B	そもそもなぜ製造にあたる部分を発展途上国が行っているのか。	「ファストファッションの裏側にある労働問題」	
C	当事者と第三者の感覚のずれはいかにして起こるのか。	「ファストファッションとプラスチックーファストファッションのあり方は変化させられるのかー」	
D	なぜ労働者の安全が保障されないのか。	「ファッションの意識を変えよう」	

スライド 35

2-③ 工夫の効果 【6班の事例】

RQ	社会的意義	動機・背景
リサイクル率と社会的背景にはどのような関係があるのか。6班 in 京都	Cさんは、メンバーと一緒にごみ問題を考えていく中で、自分たちにも解決できると感じることがあった（あきらめていたものができると感じる）。	服のリサイクルが、プラスチックのように循環モデルができていないことに着目。また、リサイクル率の高い地域に着目することで、問題の解決ができないかを考える。
リサイクル率が高い理由がわかる。↓とくにアパレルは増える。↓ゴミが減る！		仮説構築の方法 地域ごとにリサイクル率が高くなる背景を事前調査することで、仮説が導出できると考える。

年齢・職業などを元に相反する状況の地域に場合分けしリサイクル率との関係を調べる。

スライド 36

3 どのような効果を得ているのか

「受講生たちはどのように感じていたのか？」

-問い・高校生活・キャリア開発に関する変化等-

スライド 37

3 第1回振り返り（問いに関する変化）

Aさん
 思い込みをしていることに一人で気付くことができないので、思い込みに気づくためにも他の人との交流が必要だと思った。

Bさん
 去年の探究活動では（中略）あまり目的のないままアンケートをとったり、インターネットで調べ学習をしていたけど、それでいいかなあ…、どこに問題があったかなあ…とよくわからず考えていたけど、“問いの立て方”に 問題があったのだと気づいた。

スライド 38

3 第2回振り返り（問いに関する変化）

Aさん
疑問点や自分の反応に注目した上で見ると、映画のことを問題提起のタネの宝庫であると認識するようになった。

Bさん
大きな問いから小さい具体的な問いを作ったらいんだとわかり、これまでうまくいかなかった研究は問いが大きすぎて焦点を合わせられなかっただけだと気づき、ほっとした。

Cさん
みんなが考えたRQがあんまりかぶっていないくて、同じ映画を見ただけなのにこんなにも違う視点があることを知っておもしろいと思った。

スライド 39

3 第3回振り返り（問いに関する変化）

Aさん
 自分が疑問に思ったこと（RQ）と今回の講義を比較しながら聞いていると、範囲を絞ることでイメージがしやすくなり結論が出やすくなるので、良い考え方を学べた。

Bさん
 論文の制作過程で最も時間がかかるのは仮説検証だと思っていたが、そうではなく、モヤモヤを疑問にすることだと初めて知った。

スライド 40

3 第5回振り返り（問いに関する変化）

Aさん
 客観的・批判的な考え方を自分のRQにも活かして、自分はこう思っているけど他の人はどう思っているのかと、自分の考えを貫き通すのではなく、一度疑ってみることが大事だと思った。

Bさん
研究対象の規模を考慮したり対照実験によって性質が正確であることを示したりと、さまざまな観点で考えることが必要だと理解した。

スライド 41

3 第6回振り返り（問いに関する変化）

Aさん
 今回は今までに学んだことをアプトブットさせる感じだったが、インプットの時だけでは知らなかったことを知ることができたし、「こうやったらうまく進められる」とか「こうしたらわかりやすい」など、実践を通して考え方が進化した気がする。また、「個人で」ではなく「チームで」RQを考えるのは初めてだったけど、「チームで」やる時にはやっぱり「個人」がとても大切なんだと改めて感じた。

スライド 42

3 第6回振り返り（問いに関する変化）

Bさん
 ありきたりな意見は誰にでもできますが、社会的な利益もあり、ある一定のターゲットもあり、そしてまだ世に出されていない案という意見はなかなかなくて、そういった面を考慮しながら意見を出すのは難しくて、やはり一人では意見がだしづらかったです。ですが、グループのみんなと意見を出し合うことによって自分と違う視点での意見がたくさん出てくるので、それを掛け合わせると良い案というものが出てきました。

スライド 43

3 どのような効果を得ているのか（学校生活への影響）

Q スマートAPに参加したことで、あなたの学校生活に変化はありましたか？

とても変化があった	8
変化があった	13
どちらかといえば変化があった	3
どちらかといえば変化はなかった	1
変化はなかった	0
全く変化はなかった	0

スライド 44

インタビュー調査から見てきたもの
＜スマートAP参加前（Mさん）＞

学習（勉強）について

- ・ たんたん和効率良く頑張る。受験のためだった。
- ・ 成績取るために、受験のためにでしかなかった。
- ・ 総合探究は息抜きでしかなかった。
- ・ 勉強で印象に残ることが少な

探究学習について

- ・ 「これ何でやろう」と疑問が生じても知識不足やなと思っていた。
- ・ 1つの答えがあると思っていた。（それを知らないだけだと思っていた）
- ・ これまでは、自分が出会った疑問を突き詰めていくという発想がなかった。
- ・ これまで、偉い人が言っていることを調べるのが探究だと思っていた。

疑問→偉い人の意見を調べる→解決

スライド 45

＜スマートAPでの経験（Mさん）＞

- ・ 疑問を持とうと思って映画を見たら、普通だと思っていたけどおかしな点などが自分で見つげられた。
- ・ スマートAPの探究活動は、解決すべき大きな社会課題に対して、いかに自分ごとに落としこみ、探究課題を具体化していくかという取組みであった。この過程は難しかったが、とてもよい経験をした。

スライド 46

スライド 47

＜スマートAP参加後（Mさん）＞

- ・ 疑問に思ったことに対して、歴史や要素などの周辺から攻めていき、自分なりの答えを出すようになった。
- ・ 公式を覚えるではなく、これをどう生かす、さらに次を考えたくなった。
- ・ 総合探究は唯一そういう頭の使い方をするようになった。
- ・ 自分の記憶に残る経験ができた。勉強のことでこんなに頭に残ることが衝撃だった。
- ・ 小中で受けていた授業の意味がようやくわかった。
- ・ 調べ学習の意味がようやくわかった。
- ・ 今まで先生の伝えたいことがようやくわかった。
- ・ 本当の勉強の意味がわかった。
- ・ 昔の人が探究したものを今学んでいて、自分たちも探究していけないといけないと思った。

疑問→歴史や要素、周辺から攻めていく→自分なりの答えを出す

スライド 48

＜スマートAP参加前（Cさん）＞

- ・ 中学入学時の課題図書として、児童労働についての図書を読み、社会課題に関心はもったが、自分にはできないと考えていた。
- ・ 高1の探究学習は、取り掛かりやすいものを選んでた。探究活動に消極的なメンバーもいるため、深掘りしても他者の理解が追い付かないと感じていた。タイトなスケジュールの中で、部活と塾との両立もあって掘り下げられない。
- ・ 高2の探究学習は（枠組みがないので）、自分がやりたいもの（興味を抱いた）ことを選択したため、面白そうと思って取り組んだ印象がある。ただし、社会的意義は後からつけられるという発想で取り組んでいた。
- ・ 総探の時間は、「ちょっとした休憩になる」、「自分たちのしたいことができる空間」と感じていた。

スマートAPでの経験（Cさん）＞

- ・最初はこなしていく感じと思っていた。他校の生徒はまじめで頭がよくて、会話は弾まないかと思っていた。
- ・しかし、第1回から楽しくて、もっとグループの人と話したい。生徒のことや教員の講義をもっと聞きたいと思った。
- ・第2講で視聴した映画を見直し、探究活動の問いを考えた。
- ・第6講のグループワークにて、いろんなアイデアを出せる人と一緒に考える中で、自分たちのなかで原案ができて、それをどこかに提出したら「もしかしたら」自分たちでも社会問題を解決することができるかと思った。

＜スマートAP参加後（Cさん）＞

- ・関西学院高等部主催の「中・高生 探究の集い2022」を知り、スマートAPを受講したことで、スキルを得ているし、それを活かしてコンテストに出場したいと考えた。
- ・自分が中心となってリーダーとなって出ることと価値があると思った。そうすることで学びを自分のものにできると思った。スマートAPの学びの集大成として出場を決めた。
- ・スマートAPは、やらされていたのではなく、感情込めてやっていたこと、自分からやりたいことなので心に残っている。
- ・貴重な経験となり、「人間の厚み」ができた。

3 どのような効果を得ているのか（キャリア開発への影響）

Q スマートAPに参加したことで、高校卒業後の将来構
想に変化はありましたか？

とても変化があった	3
変化があった	6
どちらかといえば変化があった	8
どちらかといえば変化はなかった	6
変化はなかった	1
全く変化はなかった	1

＜キャリア展望の変化（Mさん）＞

スマートAP経験前	スマートAP経験後
- 父が教員だったこともあり、自分の考えを持たず父の真似をして教員になるのが嫌で、毛嫌いしていた。 - 芸術分野のキャリアを指したかったけど、現実的に厳しいと周囲から言われて諦めていた。こういうこともあり教員が嫌になっていた。 - 教員の大変さも知っている点も嫌になった理由だった。	- いろんな経験をして、教えるのも得意だし、スマートAPや海外研修などで視野も広がった。そして、教員を目指すようになる。 - 正しいことを押し付けるのではなく、自分が吸収したことを伝えていたらと思うようになった。 - そして、音楽を諦めていたけれど、音楽×経験を生かせると思い、教員を目指すようになった。

＜キャリア展望に関する変化（Cさん）＞

- それまでも漠然と起業をしたいと考えていたが、将来構想が具体的になった。
- スマートAPを通して、自分のためではなく、他者のために、他者の困りごとを解決したいと思うようになった。
- 中学入学の際の課題図書で児童労働を読んで問題意識をもったが、当時は自分には何もできないと思っていた。
- しかし、スマートAPでいろんなアイデアを出せる人と一緒に考える中で、自分たちのなかで原案ができて、それをどこかに提出したら「もしかしら（できるかも）」と思えるようになった。
- 「もしかしら（できるかも）」経験は、将来構想の具体化をポジティブに後押しした。

3 波及のための取組 ―実践録の作成―

スライド 55

「スマートAP実践録」はこちら
〈令和4年度プログラム〉



<https://www.kyoto-be.ne.jp/koukyou/cms/?p=398>

スライド 56

4 最後に

「個人の力を最大限生かしながら、チームによる探究の質を高めるにはどうしたらよいか？」

「個人およびチームで問いを深めるには、どうしたらよいか？」

「立てた問いに対して、どのように探究を進めるべきか？」